
ひれ伏せ！ 愚民どもっ！！

羽生 ユイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひれ伏せ！ 愚民どもっ！！

【Nコード】

N6233Z

【作者名】

羽生 ヨイ

【あらすじ】

「無礼者！ こちらの方を誰と心得る！ タケトリ皇国ミツキ・チトセ・ナヨタケ・サカキ・輝夜・月皇女様であらせられますぞ！ 頭が高い！ ひかえよっ！！」 タケトリ皇国の月皇女様が、士官学校にはいつて起こすどたばたコメディ。ドSとしか思えない側近のアキタと、ちよつと抜けてる愉快な仲間たちが、月皇女様のために頑張ったり、頑張られたり、いじられたり、虐げられたりして黒歴史を作ってくお話。

第1章 妾を誰と心得るっ！

「無礼者！ こちらの方を誰と心得る！ タケトリ皇国ミツキ・チトセ・ナヨタケ・サカキ・輝夜・月皇女様であらせられますぞ！ 頭が高い！ ひかえよっ！！」

妾に向かって「お前ちっちゃいなー。ほんとに士官学校生？ 見たことないんだけど。基礎学校生じゃないの？」と愚弄してきた男たちに、アキタが牙を向いた。

妾のことになるとアキタは過保護じゃ。

確かに妾は、小さいと言われるのは嫌いじゃがの。入学したてなのじゃし、あんまり目立ちたくないから大人しくしておこうと思っていたのに、アキタのせいでペアじゃ。

第一、大抵の者は妾より背が高いから「頭が高い」とは、無茶ぶりもいいところなんじゃ。

なんせ妾は12歳にもなって、まだ140cmしかないのじゃから。

成人の平均身長200cmの世の中で、この小ささはどういふことじゃ。なぜ妾の身長はちっとも伸びんのじゃ。18歳の成人までの6年で、あと60センチ伸びるか不安になってくるのじゃ。この2年、ちっとも伸びとる気がせんものじゃが！

アナライズ
デザイン
シーン
「どういう遺伝子設計になっておるのか見たいのに、成人するまで解析するのは厳禁ときたものじゃ！」

「す、すみません」

「申し訳ありませんっ！」

4人の男たちの内2人は、すぐさま謝罪し跪いた。かたかたと震

えておる。

しかし、妾をからかった軽そうな男は「ええっ！ ちょっと聞いただけじゃん。お前だってそう思っただろ？」と、隣に立つばかり男に向かつて相槌を求めておった。

ばかりでかい男はアキタの発言に呆気にとられて突っ立っておったようだが、ギロリとアキタの絶対零度の視線を向けられて、慌てて軽そうな男の腕を取り、「馬鹿。今のはお前が悪い」と諫めて、共に跪いた。

しかし、一番でかい男は跪いても妾よりでかかった……。でかい男と視線が合ったが、男のほうが若干視線が上だった。さすがに妾がいかに小さいといっても、跪かせれば妾より大抵の者の視線は下になるんじやが、でか男はでかすぎた。

でか男も驚いたのだろう。まじまじと妾を見下ろして、ぽつりと呟いた。

「……確かに小さい」

ぶちんつ。

妾だって、わかっておる。妾は確かに小さい。だからって改めて言うことかの！？

「ひれ伏せ！ この愚民どもっ！！」

妾は、妾は、妾は――！

小さいけど、小さくない――！

そなたがでかすぎるのが問題なのじゃ――！

妾と下僕その1その2の出会いは、こんなふう以最悪だった。
この後、在学中に妾に向かつて「小さい」という単語が使われな
かったことや、妾に話しかけるとき皆が跪いておつたのを鑑みると
やはり、このときのこやつらが無礼極まりないかわかるというもの
じゃ。

後に聞いたことじゃが、このときの妾は相当な威圧を放ち、4人
だけでなく、同じ棟にいるもの全てがひれ伏しておつたという事実
無根の噂が流れておつたらしい。

まったく、大げさな。妾の軽い叱責くらいで、そんなこと起こる
わけなかるうに。暇人どもが、でたらめを言いをつて。下々の噂と
いうのは尾ひれ背びれ胸びれつくから困つたものじゃ。

>>>ミツキ・チトセ・ナヨタケ・サカキ・輝夜・月皇女伝記より
抜粋<<<

ミツキ・チトセ・ナヨタケ・サカキ・輝夜・月皇女、月皇国第一士
官学校に入学す。同日、無礼を働いた者に罰を与える。何人たりも
頭を上げること適わず。咎人、学生一同ひれ伏して許しを請い、怒
りが静まるのを待つ。類まれな力の片鱗を臣民は垣間見、ここに忠
誠を誓つ。

>>>記録官：秋田・ミムロ・インベ・アキタ<<<

第1章 妾を誰と心得るっ！（後書き）

初投稿です。勢いだけで書いてしまいました

拙い作品ではございますが、評価ポイントやお気に入り登録、感想などを頂けるととっても嬉しいです。

今後も本作品を宜しくお願いします。

第2章 注意は端的に。(前書き)

—

第2章 注意は端的に。

ついカツとなつて声をはりあげてしまい妾は後悔した。あれしきのことで感情を荒げるとは、まだまだ修行が足りぬ。

男たちを見ると、今度は素直にひれ伏しておつた。

軽薄男なぞ、さっきの余裕もどこへその、顔を俯けながらブツブツ「俺死し？ 死ぬ？ 死ぬとき。俺死ねば。死ぬ」とか、ちよつとおかしな言葉を呟いておつた。

ふう、とため息をつき、無意識にはいつていた肩の力を抜く。

この場をどう治めるか困つて、アキタを見る。忠実で有能な側仕えは、妾の意図をすぐに読み取ってくれた。

「この無礼者ども。月皇女様に対する非礼の数々、その命で償うだけで許してやること、光栄に思うがいい！」

ちよ！ そんな展開望んでおらぬぞ！

アキタの声に反応して、男たちが顔をあげる。

その顔は真つ青を通り越して真つ白になっていた。

アキタは微笑み、護身用の光線銃を取り出す。安全装置を解除する音が、静かな廊下に響き渡つた。

「アキタ、やめよ」

急展開についていけず、少し戸惑っていた妾だったが、念のため止めることにした。

流石にいくら過保護なアキタといつても本当に私刑で命をとるとは思わぬが、声をかける。ここは第一士官学校であるのだし、生徒

は全て貴族以上しかおらぬ。
舐められるのも困るが、わざわざ事件を起こすのも厄介なことし
かならぬ。

「月皇女様がそうおっしゃるなら」

アキタは構えていた光線銃をしぶしぶしまい、「優しい月皇女様
に感謝することね」と言った。

アキタ、そなた思いつきり悪役なんじゃがー！

怒らせると恐ろしいやつじゃ、と内心青褪めつつ、男たちに声を
かける。

「以後、気をつけよ」

妾的には、小さいって言うとか、人のどうしようもない身体的
特徴を貶めるのは止めよとか、何を食べればそんなに身長が伸びる
のかとか、言いたいことはいっぱいあったのだが、今は何を言っ
ても聞こえてなさそうなので、端的に注意しておくことにした。

以後、気をつけよとは、便利な言葉じゃ！

何に気をつけよとかいうと、それだけしか注意を促がせないが、
敢えて言わないことで、全てを網羅できる。魔法の言葉じゃの。

妾は、これでよしと内心でガッツポーズをしてアキタに声をかけ、
講堂に向かうことにした。

初日から遅刻なんぞしたくないからの。

新入生代表挨拶なるものを頼まれておるし、がんばらねば！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6233z/>

ひれ伏せ！ 愚民どもっ！！

2011年12月20日23時54分発行